

## 塩 と 鉄

人が生活していくためには塩分を摂取する必要があります。縄文人がどのように塩分を摂取していたのか、具体的なことはわかりませんが、海水からとった塩を何らかの方法で入手したと考えられています。弥生時代には、山野で植物を採取し、狩りをしていた生活から米を主食とした生活に変化します。

海岸近くにあるムラでは海水や魚・貝から塩分を摂っていたでしょうが、海から遠い山間部のムラでは塩分を確保することは難しかったと思われます。弥生時代の遺跡では、海水から固形の塩をつくる道具として製塩土器や塩を煮詰めるための炉跡も出土しています。ただ、その塩づくりの製塩遺跡は、海岸部にかぎられており、そこで作られた塩は物々交換のひとつとして山間部のムラまで持ち込まれたようです。

本格的に、クニが関与して塩生産をおこなうのは古墳時代中期以降と考えられます。これは、人が塩分を摂取するだけでなく、中国・朝鮮半島から馬・乗馬の風習が伝わり、馬を飼育するために多量の塩が必要になったからだと考えられています。



塩水を固形化するための炉跡（浦入遺跡）（舞鶴市教育委員会提供）

奈良・平安時代には国に納める税金のひとつとして塩が記載されています。

塩の生産に関連した平安時代の遺跡に舞鶴市浦入<sup>うらにゅう</sup>遺跡があります。この遺跡では、濃縮した塩水を多量の燃料（薪<sup>まき</sup>）で燃やして固体にするための炉の跡が数

多く見つかりました。炉の周辺には焼けた土と薪を燃やした後の灰、製塩土器が粉々になって出土しました。浦入遺跡では、「笠百私印」と押印された土製の支脚が出土しており、「笠」氏あるいは「加佐」郡を統括した豪族との関係を窺わせる資料と考えられます。



遠處遺跡の製鉄作業風景復原図（早川和子作画）

塩と同じように多量の薪を必要とする生産遺跡に、製鉄遺跡があります。京丹後市遠處遺跡では、砂鉄を溶かして不純物を取り除き、純度の高い鉄をつくるための炉跡のほか、燃料である炭をつくるための炭窯、純度の高い鉄を鎌や刀などを製品に加工するための建物、工人の住む竪穴式住居跡などが見つかっています。古墳時代後期から奈良時代にかけて、この遺跡で製鉄作業が行われていたようです。

砂鉄から純度の高い鉄に精製するには、多量の燃料を必要とします。周辺の山林を伐採して燃料を確保したようです。自然乾燥させた薪では鉄を溶かすほどの高温にならないので、樹木を炭（白炭）に変えて燃料に使いました。製鉄の炉は炉の本体を壊して鉄を取り出します。そのため、炉本体は発掘調査では残りませんが、炉の底部にある床（炉底）部分や、多量に焼かれた薪の灰、炉から流れ出た砂鉄に含まれる不純物を含んだ鉄滓（スラグ）が多量に流れ出た痕跡が残ります。こういったものから、炉の構造や製鉄の方法を復元します。

（石井清司）